



リヤカー、  
駆けぬける

「イチ、ニ、イチ、ニ！」

ハー、ハー、ゼイゼイ

「痛いよお、痛いよう！」

リヤカーを懸命に引く掛け声と荒い息、そして僕の泣き声が重なり合って、あぜ道に響き渡った。

あれは昭和三十年、僕が中学入学を控えた春休みのことだった。

ある朝、泣きはらした目のお母さんが言った。

「田舎の友達が急に亡くなったの。どうしてもお葬式に参列したい。孝太郎も一緒に帰る？あなたはすぐ熱を出す子だったから、赤ちゃんの時からずっと田舎に帰っていないものね」

僕は第一志望の中学に合格し、ふわふわだけどスースーするような日を過ごしていたので、つい頷いてしまった。

慌ただしくその日の夜、自宅から歩いて東京駅に向かい、夜九時発の夜行急行に乗った。初めての長い旅行で、ワクワクしていたのだが、座席は固くて眠れず、頭も体もだるかった。

二度乗り換えて翌日の昼前、やっと着いた駅も、なんだかみすぼらしかった。

(こんなことなら、姉さんと留守番をしていればよかった)

その後悔は、バスに乗って一層強くなった。山道を曲がりくねって進むのでゆれがひどく、天井に頭をぶつけそうで、外の景色を見る余裕もなかったのだ。窓を開けても、埃っぽい春風は気分が悪くなるばかりだった。何度ももどしそうになり、ハンカチで口を押さえたまま、停留所らしいところで降りた。そして、そこで、信じられないものを目にした。荷車を引いた馬が、でこぼこ道に大きな糞を落としながら歩いていたのだ。僕はハンカチで鼻も押さえて、家に向かった。

お母さんが育ったその家は、だだっ広くて、襖と障子ばかりが多かった。遅い昼食を食べる気にもなれず、縁側でうとうとうとしていた。

「それじゃすみません、明日の夕方には戻りますのでよろしくお願いします」

お母さんの声が出て、黒い服が庭を横切ったようだった。すこし眠ったのか、何かの気配で目を覚ますと、僕を覗き込んでいる男の子が二人いた。

「東京から来たんやて」

「俺らと同じ中学生になるとは思えんいう、顔もどっこも真っ白じゃ」

「ハンケチで鼻押さえて歩いとったぞ」

「そんなもんおなごの持つもんじゃ、めめしいいう」

僕は、その無遠慮な言葉にムカツとしたし、それ以上に、他人の家に勝手に入って来ることに驚いて起き上がって、彼らを睨んだ。話しを聞いていると、僕の従弟の稔とその友だちは僕と同級生で、今から外へ遊びに行くらしいということが分かった。

「孝太郎君、一緒に遊んでおいで。ここにいても退屈じゃろう。稔もあんたらもよう気いつけたってな」

伯母さんにそう言われて、しぶしぶ靴を履いた。そして、坊主頭を揺らしながら歩く彼らの後をついて行った。稔は真っ黒で肩幅も広く、もう中学生のようだ。

「おう、正樹、ザリガニのえさは何もってきたんじゃ」

そう言われた背が高くひょろっとした子はニンマリ笑ってバケツを見せながら言った。

「大介、おまえが昨日釣った鮎は大きかったのう、今日も釣れるかのう」

大介と呼ばれた子は、名前と違って背は低いがすぼっしこそうだった。三人は、ふざけ合いながら土手を駆け登った。眩しいほど水面を輝かせた川がゆったりと流れていた。彼らは、澄んだ水の中に入ると、慣れた様子で堰を作り、魚を採ることに熱中した。全く無視された僕は、土手の斜面に寝転がった。

(五年生から進学クラスに入り、問題集ばかり解いてきた。休みの日も、家庭教師が来て山のような宿題を出されたっけ)

そんなことを考えているとまた臉が重くなってきた。春の日差しがやわらかい。

靴を泥だらけにしながら帰ると、夕食だった。さすがにお腹が空いてお膳の前に座った。正座が嫌だったが、稔まできちんと座っているのだから我慢した。肉も魚もないおかげで物足りなかったけれど、みんなはおいしそうに食べていた。

夕食の後、僕は稔に尋ねた。

「テレビはどこ？今日は『ジェスチャー』がある日だよ」

「そないなもんあるかいな、テレビあるんは岩倉医院だけや」

稔は、目をつりあげて怒鳴った。突然のことに驚いたけれど、僕は改めて気付いた。この家には、冷蔵庫も電気炊飯器も水道もガスも何もないのだ。

さらに、風呂では腰を抜かしそうになった。大きな釜が置かれていたのだ。本で見た地獄の釜とそっくりな物が置かれていたのだ。伯母さんは『ごえもんさん』と呼んでいた。その風呂も便所も屋外にあり、下駄をはいて行くのだ。

「よくこんなところで暮らせるもんだ」

そう思って早々と布団にもぐりこんだが、静か過ぎてよく眠れなかった。

翌日も青空が広がっていた。

「孝太郎君行くで〜」

当たり前のように誘われて、また何となく出かけて行った。今日は昨日の三人と、一年になる弟の行雄も一緒だ。行く先は神社の裏山で、そこで何か採るらしい。うっそうとした樹が生い茂っていて、僕の家近くの公園とは違う濃い緑の匂いだ。

みんなは競争で石段を登り始めた。年下に負けてはおられないと、僕も思いっきり駆け上がった。

グキッ！

足首に嫌な音がしたと思ったとたん、猛烈な痛みを襲われた。

「痛い！」

そう叫ぶと、うずくまってしまった。僕の周りにみんなが集まった。稔は大声で言った。

「リヤカーを借りてこい！」

正樹と大介がすぐに駆けて行った。

「下までおりなしゃーない。孝太郎君、がんばれ！」

稔は肩を貸して僕を立たせると、一步一步下りて行った。背は僕より低いのにがっしりとして力強かった。

「お前は家に帰って誰かに知らせてこい」

泣きだした弟の行雄に命令した。

「泣く間があったら走れ！」

行雄は、涙を袖で拭くと、転びそうになりながらも懸命に走り去った。僕たちが石段を下りると、もうリヤカーが待っていた。稔と正樹がリヤカーをひき、大介が後ろから押す。

「一、二、一、二」

掛け声を合わせて、みんな必死だ。

「ハーハー、ゼーゼー」

三人の息も次第に荒くなる。真っ赤な顔に汗を滴らせている。

「ハーハー、ゼーゼー」

しかし、リヤカーのスピードは落ちない。稔の声だけが辺りに響く。

「一、二、一、二！」

「痛い！痛い！」

呻いていた僕は、みんなの様子に、足より心が痛くなった。

畦道を抜けて少し広い道に出ると、スピードがもっと上がった。三人が息絶え絶えになって岩倉医院に着くと、後は先生に任せた。

「靱帯やられたな、まあしばらく固めとったら治るからな。安心せー」

岩倉先生は石膏を塗った包帯をぐるぐる巻きながら、ガハハと笑った。

「みんなご苦労さんやったな、ついでに帰りも頼むで。腕白坊主ども」

自転車で慌てて駆けつけた伯父さんが、ホッとした顔で先生と話している。荷台に乗って来た行雄も、涙をためたまま笑った。

帰り道は、みんなワーワー元気に騒ぎながらゆっくり進んだ。

(こはお医者さんまで乱暴だったなあ)

リヤカーに揺られた僕は、痛みはあったけれど、なんだか体中がほんわりした。あぜ道の両側には、レンゲや麦の穂がゆれていた。

翌日の昼過ぎ、停留所で、お母さんと松葉杖をついた僕、そして伯母さんと稔がバスを待っていた。

「お世話になりました。ご厄介をかけてしまって」

お母さんがまた頭を下げた。

「そんな何べんも言うてくださらんでも。気をつけて帰って下さいの」

「ほんとにありがとうございました。昨日はもう驚いてしまって。松葉杖を見たときは生きた心地がしませんでしたわ」

そんなことをお母さんたちが話している後ろで、稔と僕は目を合わせた。

「ありがとうね、僕さ、なんかさ、来た時は嫌でたまんなかったけど、なんかさ、今は違うよ」

「また来年来たらええやん、待ってるで」

二人は照れながら軽い握手をした。それから僕は、思いっきり息を吸い込んだ。

乗り込んだバスの窓から強く手を振った。そして、流れていくレンゲや麦の穂にも、そっと手を振った。

大人になった今、あの春の日の光景をよく思い出す。そして朝の産みたての玉子かけご飯の美味しかったことも。稔とは遠く離れているが、従弟同士の仲の良い付き合いが続いている。稔の家にも、もうあのスリル満点の五右衛門風呂はない。しかし、採れたての野菜の煮物の味は変わらない。それをつまみに彼と飲む酒が一番うまいのだ。

稔は今日も、春の夕焼けにたくましい背中を染められてあのあぜ道を歩いただろうか。

「よし、この夏休みは帰ってみるか」

僕は、息子たちを呼んだ。